

聖書:列王記第二3章13～27節

説教:この地は水で満たされる

はじめに

ここまでのあらすじを振り返ります。北王国のヨラムと南王国のヨシャファテ、それにエドムの王の三人の王がモアブを攻めるために集まります。ところが部隊が進むのに手間取ってしまい、とうとう七日目になり水がなくなる。ヨラムが神をのろうのを見て、ヨシャファテはこう言う。「ここには、主のみこころを求めることができる主の預言者はいないのですか。」そのときヨラムの家来の一人が「エリヤの手に水を注いだエリシャがいます」と答え、それで三人はエリシャのところに行くことにした。これが前回までの流れです。

今日の所は、その三人の王がエリシャから主のことばを聞き、敵の混乱に乗じて大勝利を収める。そこで話して終わるのかと思ったら、最後のところに「イスラエル人に対する激しい怒りが起こった」とあって、ととまどいます。結論から言えば、これは神の救いに関係することなのですが、それがどのようなことなのかを考えてまいります。

## 1 ふたりの王

### 1) ヨラム

そこでまずヨラムとヨシャファテ、このふたりの王の信仰について確認していきます。ヨラムのことは3章2節にあります。「彼は主の目に悪であることを行なったが、彼の父母ほどではなかった。彼は、父が作ったバアルの石の柱を取り除いた。」

主の目に悪であることを行なった。では完全に主を忘れ、異教の神々を拝むような王だったのかと言えば、そこは微妙です。七日間旅を続けて水がなくなったとき、「この三人の王を呼び集めたのは、主だ」と言っているのです、主の名前は知っている。では名前を知ってはいればそれで十分なのかという話になる。

例えば、お見合い結婚というものがあります。この人どうですかと写真と名前を見せてもらったとして、それだけで結婚を決め人はいません。まず相手の人となり、性格、何が趣味で何に興味を持っているのか、ちろん全部分かるわけではありませんが、それでも相手の人格を知ってから決めます。神を知るといことはこれによく似ています。

ヨラムは神の名前が主であることは知っていました。では、その主という方がどのような方なのか、神の人格は知っていたのか。彼はなんと

いますか。「この三人の王を呼び集めたのは、モアブの手に渡すためだったのだ。」ひとことでは、主と呼ばれる神は恐ろしい神である。怖い神である。そのような認識です。これがヨラムの信仰でした。

### 2) ヨシャファテ

次にヨシャファテはどうであったか。並行箇所である歴代誌第二20章32節に、「主の目にかなることを行なった」と書かれていて、もちろん彼もいろいろ失敗はしますが基本的には主を信じる信仰者でした。七日目に水がなくなったときに「ここには、主のみこころを求めることができる主の預言者はいないのですか」と言えたのも、この信仰があったからです。

ここで一つの疑問が湧いてくる。それほど信仰があるなら、七日目に水がなくなったと騒いであらではなく、出発する前に預言者に聞くべきではなかったのか。たまたま忘れていたのでしょうか。いいえ、決してそんなことはありません。列王記第一22章の場面では、ヨシャファテは周りの空気などまったく気にしないで堂々と、「ここには、われわれがみこころを求めることのできる主の預言者が、ほかにいないのですか」と声をあげた。そういう人です。それなのに、どうして今回は最初に預言者の声を聞こうとしないのか。実は、これも神の救いに関係している。そのことは最後に触れることにします。

## 2 エリシャ

### 1) 「ヨシャファテの顔を立てるのでなければ」

続いてエリシャのこと見ていきます。三人の王が来たとき、エリシャはヨラムと話すことは何もなとぎっぱりと断った。ところが、15節以降になると、手のひらを返すように、主のことばを語り出す。何が起きたのでしょうか。

きっかけはヨラムのこのことばです。「いや、モアブの手に渡すために、この三人の王を呼び集めたのは、主だ。」このことばにエリシャが強く反応し、ヨシャファテの顔に免じて、主のみことばを語ることになった。エリシャの気まぐれでしょうか。いいえ、これも神の救いに関係があります。

### 2) この地は水で満たされる

どんな関係があるのかを考える前に、エリシャが語ったことばを見ておきます。16節。「主はこう言われます。『この涸れた谷にはたくさんの水がたまる。』主がこう言われるからです。『風を見ず、大雨を見なくても、この涸れた谷には水があふれる。あなたがたも、あなたがたの家畜も、動物もこれを飲む。』これは主の目には小さなことです。主はモアブをあなたがたの手に渡されます。」

三人の王は、飲む水が全くなりモアブ人に殺されるというところ追い込まれたことがきっかけでエリシャのところに来ました。それに対してエリシャは主のことばとして、涸れた谷にたくさんの水がたまり、人も動物もこの水を飲むようになり、主はモアブをあなたがたの手に渡すと言うのです。ひとこと言えば、あなたがたは救われると言った。

イスラエルに行くとは分かるのですが、荒野には丸みを帯びた谷が走っているのですが谷底には水は一つもなく、乾いた土しか見えません。それが雨が降らないのに水があふれるのはどうしてかと思うでしょう。これは別に不思議なことではなく、上流の標高の高いところに降った雨が地下水となって流れてきて、あるとき突然谷に水が流れることがあるのだそうです。ただ、それがいつどこで起きるのかは予想できない。このときは、モアブ人の目の前で朝日が昇るときに起きた。その結果何が起きたのかは、書かれているとおりです。

### 3 イエス・キリストの救い

#### 1) 顔を立てる

わきに置いていた問題に戻ります。ヨラムは、主は自分たちを滅ぼそうとしている。ヨラムはそんな意味のことを語った。別の言い方をすれば、主はわざわざの神だということです。エリシャはそこに強く反応します。ヨラムの言っていることはまったく間違っている。主とはどのような方なのか、はっきり示さなければならぬと突き動かされるのです。

しかしすぐにそうしたのではない。一つの手続きを踏んでいく。14節後半。「もし私がユダの王ヨシャファテの顔を立てるのでなければ、私は決してあなたに目も留めず、あなたにあうこともしなかったでしょう。」

日本語にも『顔を立てる』という言い方がありますが、ここはまさにそれです。本当はヨラムと話しをする筋合いは一切ないけれど、正しい人であるヨシャファテが仲立ちに入ってくれたというのなら、彼の顔を潰すわけにはいかない。なので主の

ことばを語ろう。そのような手続きです。どうして、こんな手続きを踏むのでしょうか。

わかりやすい例を挙げましょう。昔の父親はどこもそうでしたが、子どもが悪いことをすると非常に厳しかった。まだ小学校一年生くらいの私は、悪いことをした罰に暗い作業小屋に閉じ込められてしまったことがあります。どうなるのかと心細い思いでいたら、祖母が迎えに来て助かった。父親は戻って来た私を見て何も言わない。父親だっただけでも怒るわけにはいかない。やはり子どもを家に戻したい。しかし父親が子どもの罪をさばいたのですから、父親が直接子どもを赦すことはできません。そこで祖母の顔に免じて私が赦された。そういう構図になる。

神の救いのこれと同じです。神は罪人である私たちを救いたいと願っている。しかし父なる神ご自身が直接赦すことはできない。そこで父なる神は、イエス・キリストの顔に免じて私たちの罪を赦してくださったのだということになる。エリシャは神のご性質を知って、そのとおりにしているだけです。

#### 2) 血を流すことで

そこで考えなければなりません。たとえば子どもが悪いことをしても祖母の顔に免じて子どもが赦され、それ以上のことはなにも要求されません。ヨラムの場合もそうです。しかし、神の場合はどうでしょう。イエス・キリストの顔の免じてというけれど、ただ顔を貸したのではありません。今日のところにこう書いてる。モアブ人は、水に輝く朝日が人の血に見えたことがきっかけで、滅ぼされました。水が涸れた谷から流れ出て土地に満ちたとき、それは三人の王を救った見ずとなったと同時に、敵を滅ぼす血にもなった。神の子であるイエス・キリストが私たちのいのちの水とんられ、この方が十字架で流してくださった血のゆえに私たちの罪は赦されていく。そのことにつながるのではないのでしょうか。

#### 3) 長男をささげ物として献げる

私たちは何度も聞かされ、いまさら驚かないかもしれませんが、それがどれほど異常な事態であるのかを覚えてたい。27節前半。「そこで、彼は自分に代わって王となる長男を取り、その子を城壁の上で全焼のささげ物として献げた。このことのゆえに、イスラエル人に対する激しい怒りが起こった。」

激しく怒ったのは神です。なぜ怒るのでしょうか。モーセの律法にこうあるからです。「自分の子どもを一人でも、火の中を通らせてモレクに渡してはならない。あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。」（レビ記18章21節）これはイスラエル人に対する命令なのですが、このことを敵であるモアブの王がしたとしても、その怒りはイスラエルに下る。理不尽ではありますが、それほど絶対にやってはならないことだということになります。

これほどまでに厳しく命じて禁じていたのです。ところが、神ご自身がこの律法を破るのです。神のひとり子である方が十字架でさばかれるとはそのようなことではないですか。十字架というのは、それほどまでして与えられたものだったのです。

#### 4) 罪人が立ち返る時を待つ

最後に一つだけ問題が残されていました。ヨシャファテはなぜ戦いに出る前に預言者に聞こうとしなかったのか。あえてそうしなかったのです。ヨラムの性格を見抜いているからです。仮に、戦いの前に預言者を呼んだとしても決して聞く耳を持たない。だからあえて預言者のことを口に出さず、ヨラムの言うとおりに七間の旅を続けた。

そうするとこういうことになりませんか。ヨシャファテは、この旅がどういう結末になるかを予想していたはずですが、水がなくなり大変危険な状態に追い込まれるだろう。予想していたのに、何も言わずにヨラムといっしょに進み、ヨラムが追い込まれて進退窮まってから、主の預言者のところに連れて行く。ヨシャファテはそこまで考えていた。

神とはこのような方なのです。神を信じていなくても、神に怒りをぶつけている人に対してでも、神はいのちをかけながら、私たちがこの方に心を開く時を忍耐強く待ってくださいます。